

身体テクノロジー化とジェンダー改革

—「ジェンダーフリー」論をめぐる—

河上睦子（相模女子大学）

(1) 「ジェンダーフリー」をめぐる論議とは

近年「ジェンダーフリー」の語をめぐる論議がなされている。この「ジェンダーフリー」の語は日本のフェミニズム理論から出てきたものであるゆえに、フェミニズムの「ジェンダー」論の論議でもある。しかしこの論議はそれらの用語の意味や用語法が主題ではない。それは、この語をめぐる「政治的な」論議であり、この語を使用する側（フェミニズム）と攻撃する側（バックラッシュ）とのイデオロギー論議なのである。

バックラッシュ派はその語をバッシングすることにより、その語を使用するフェミニズム運動および「ジェンダー改革」を阻止し、旧来の女性領分と男性領分との二分法の「ジェンダー秩序」をイデオロギーによって復権しようとしている。他方フェミニズム側はそのバックラッシュの動きに対抗して、この語の意味を明らかにしつつ、ジェンダー改革の内容を明確にしようとしている。両者が論争しようとしているのは、この「ジェンダーフリー」の語を媒介にして「再生産領域の再編成」をめぐるイデオロギー問題であるようである。

だが、フェミニズムとは、女性が男性優位主義的な考え方や社会構成のあり方から解放され、個人的にも社会的にも理論的にも自立した存在として尊重されるものとして承認されるための社会的な運動と多様な分野での実践的な研究・理論である。それゆえにそれは再生産領域の編成をめぐる「政治的な」運動やイデオロギーに押し込めることはできないものである。そしてそこから生み出された「ジェンダー」概念は国際的にも学術的な用語にもなっており、またそこで提唱された「ジェンダー改革」とは、家族や教育の再生産領域の問題を含むものであると同時に、生産領域や多様な文化領域や学問領域などに関わる問題でもある。

(2) 「ジェンダーフリー」論の背景

フェミニズム理論界がこの「ジェンダーフリー」論議に本格的に取り組むようになったのは、バックラッシュ側の攻撃が強制的な政治力をもって遂行され始めた昨年頃からである。そこではジェンダーおよび「ジェンダーフリー」概念の理論的な整備と同時に、バッシングを生み出す「政治的なもの」の分析^①もおこなっているが、そうしたフェミニズムの取り組みの背景には、次のような事情も関係しているように思う。

近年フェミニズムの提唱するジェンダー改革に対して、バックラッシュ派を肯定する立場（「フェミナチ」）ではないが「消極的な」立場をとるような考えも少なからずみられる。これは、ジェンダー平等への取り組みが成果をあげ、女性たちの社会的参画が広がり、また女性の性的自立のための社会制度も整備されつつある一方、バブル崩壊後非正規雇用者の増加や男性の「周縁化」がおこり、ジェンダー間やジェンダ

一内部での格差が大きくなってきている^②。また生産領域における新自由主義的な競争主義の貫徹によって家族の生活基盤も不安定になり、教育問題を始め社会的な不安が増している。そうした社会的状況のもとでは、ジェンダー改革に向かうよりは、ジェンダー秩序の保守主義的復権を受け入れる素地もうまれてきているようである。

他方でフェミニズム内部の問題がある。1990年代以降日本のフェミニズム運動は国際的な運動と連携しながら、女性学からジェンダー学へと広がり、その社会運動の課題であるジェンダー改革も、女性たちの視点を超えて男女が共有するものとなってきた。しかし近年では「ポストフェミニズム」理論が台頭し、そこではセクシュアリティの多様性やジェンダーの枠組み自体への検証が進められるようになったが、これは、運動がジェンダーの座標のみでなく性的マイノリティの座標をもつものとなると同時に、「女性」のみに焦点を当てた運動や理論研究、女性史や女性の心身の研究、母性性に関わる研究などは「ジェンダー本質主義」として忌避され、周縁化される傾向もみられるようになってきた。そしてフェミニズムの共通基盤といわれる「女性」の視点が霞み、改革の指標がジェンダー枠を超えるようになってきた。「ジェンダーフリー」論議は、こうしたフェミニズムが抱えつつあった「ジェンダー」問題を、ある意味では外部から顕在化したともいえるようである。

フェミニズムはこうした内外の問題から、今日改めて、ジェンダー論の再構築と「ジェンダーフリー」の考えを再考することを課せられているように思う。

(3) ジェンダー論のなかの「ジェンダーフリー」

フェミニズム理論界の再定義によれば、「ジェンダー」は①性差・性別②社会的文化的性差③性別役割・性別規範・性別参照枠組み④性に関わる差別/被差別関係・権力支配関係という四つの意味をもっている（この意味は国際的にも学術的な用語として認知されるものである）。これらの四つの語彙は文脈的に使用されてきたが、フェミニズムにおいては③④の意味が重要である。つまりフェミニズムにあっては、ジェンダー概念はジェンダー改革論をとまなうものである^③。

「ジェンダーフリー」概念は、そのジェンダーの四つの意味に応じたもの、すなわち「ジェンダーの二分法①②からの自由」「ジェンダー③の抑圧・縛りからの自由」「ジェンダー④の差別・偏りからの自由」といえるようである^④。そしてフェミニズムが使用してきた「ジェンダーフリー」とは、主として後者の二つに依拠したものといえる。それに対してバックラッシュ派が攻撃的に使用する「ジェンダーフリー」（フェミニズムは性差の否定と人間の中性を指示すると断定する）は、前者の「ジェンダーの二分法からの自由」を転用した「ジェンダーレス」の意味である^⑤。そしてジェンダーレスの語彙をもってフェミニズムの「ジェンダーフリー」論をバッシングするわけである。

だがそうした「ジェンダーフリー」攻撃が生じてくるのは、近年の「ポストフェミニズム」理論の台頭と無関係ではないようである。もちろん「ポストフェミニズム」の理論はジェンダーレスを提唱するものではまったくないが、しかしその理論がセックスのジェンダーへの還元論や構築論を展開し、ジェンダーの二分法自体も問題化することを、バックラッシュ派は曲解の根拠としているようである。

(4) 「ジェンダーフリー」とテクノロジー

「ジェンダーフリー」論においては、身体テクノロジー化についての視点が重要である。というのも「ジェンダーの二分法からの自由」や「ジェンダーレス」を現実的な身体において実現するのは、テクノロジーだからである。今日の身体テクノロジーは、最先端の生殖補助技術、細胞・組織の移植技術、身体改造技術、性転換手術などによって性的身体自体を改造し、性の境界を越える段階にまで達している。そうしたテクノロジーが直接対象とするのはジェンダーではなく、「セックス」の身体であるが、それはセックスの身体がもつ差異や境界を超えて改造する。まさに身体改造テクノロジーこそは性的身体（セックス）を「フリー」にするものである。したがって「ジェンダーフリー」論議はこの身体に関するテクノロジー論なしには語れないはずである。

しかしバックラッシュ派は、ジェンダーレスを実質的に遂行するこのテクノロジー問題には触れない。この立場にとっては、テクノロジーの推進は国家利益に寄与するものとして否定されないものである。だがそのテクノロジーはあくまでジェンダー秩序の枠内で推進されるべきもので、「個人」のニーズで推進されてはならない（生殖補助技術も家族再生維持のためであり、ジェンダー秩序を維持する身体改造技術は許されても、それを壊す可能性をもつ性転換手術には歯止めをかけねばならない）。バックラッシュ派の新保守主義イデオロギーを支えるナショナリズムと新自由主義の両輪を、テクノロジー問題に関して反立しないようにしなければならない。こうしてテクノロジーをジェンダー秩序内に治めるために、テクノロジー問題の外部での「ジェンダーフリー」攻撃が必要なのである。ここでは「ジェンダーフリー」論をテクノロジー論に接合してはならないのである。

フェミニズムにとっては、セックスの身体とテクノロジーとの関係は、「不妊」治療技術や人工妊娠中絶技術に見られるように、女性の身体における主体性や自由の問題に関わるものとして、ジェンダー改革にも寄与することができるものとみなされてきた。ジェンダー改革は性別役割分業や女性の社会的参画の問題だけではなく、女性身体に関する主体性・自立の問題でもあるので、身体テクノロジーや生殖テクノロジーの問題はフェミニズムの課題であり、またジェンダー改革論で取り上げられてきたのである。

こうした女性の主体性確立の観点から、フェミニズムはテクノロジーに関する「自己決定論」を主張してきた。しかし「自己決定論」は新自由主義的な立場にたつものであり、またニーズに応じてテクノロジーを推し進めるものである。グローバルな技術競争や市場化の枠内にある。またそうしたテクノロジーの利用は自然支配という近代技術の本質上、セックスの身体を改造し、身体自然性を越えることもできる。つまり「自己決定」は、性的身体を改造してセックスの身体がもつ境界や制約からフリーにしたり、家事や育児や性役割をする母体サイボーグや女体ロボットを創ったりすることを推進するものともいえる。自己決定による身体テクノロジー化は既存のジェンダー秩序を超えることができる一方、逆に補完することもできるのであり、それゆえにテクノロジーに関する自己決定論は、必ずしもジェンダー改革を保証するも

のとはいえないのである。それは究極的には、「セックスの身体からのフリー」を通して、身体なき「ジェンダーレス」の世界に通じているのである。「ジェンダーレス」がフェミニズムの目標ではなかったはずである。

(5) 身体論とジェンダー改革

こうした「ジェンダーレス」に向かうテクノロジーを拒否して、セックスの身体に根ざしたジェンダー世界を再構築しようという考え方もある。これはバックラッシュ派とは別の見地からの反「ジェンダーフリー」論である。この論者^⑥はフェミニズムのジェンダー平等の見解を批判し、ジェンダーの差異を身体性に定位したうえで、「女性性」を社会的労働やテクノロジーへさし向けるのではなく、エロスのなジェンダー関係を構築するように提唱する。この「身体性」論は、フェミニズム理論のなかでは「ジェンダー本質主義」に該当するが、からだに向き合うお産のすすめ、フェミニンな身体性の復権、エロスのな対的関係の形成などの「身体知」や「身体経験」を重視し、ここではジェンダー平等は必要ではなく、「ジェンダーフリー」にも無縁である。だがこのジェンダー復権論は、私たちの性的身体が経済社会やテクノロジーによって維持される環境空間の外部にある、私事的なものであるかのように考えている。それにもかかわらずこの立場が女性たちの共感を呼んでいるのは、「身体性」という視点をジェンダー論に再提起したからである。

たしかに「身体性」への視点はジェンダー論を考える際に重要である。ジェンダーの身体はジェンダーの世界を支える足場だからである。フェミニズムが「ジェンダーフリー」バッシングを乗り越えるためには、身体性の視点を取り込んだジェンダー論やジェンダー改革論が必要である、と私は考える。身体性の視点なしにはテクノロジーがもたらすことへの対応もみえてこない。性的身体の境界に影響を及ぼすのは、医療テクノロジーのみではない。そのテクノロジーは、産業テクノロジーやITテクノロジーや軍事テクノロジーと一体であり、それらは性的身体の境界を内部から直接的に改造するだけでなく、外部からも変えていっている。環境ホルモンは生命の「メス化」を引き起こし、精子を減少させ、身体のジェンダー世界を変容させている。他方でITテクノロジーが「ジェンダーフリー」の脱身体の仮想空間を出現させ、現実のジェンダー的身体との心身二元の世界を生み出している。

テクノロジーが対象とし影響を及ぼすのは「Körper」としての身体のセックスであるが、テクノロジー時代の生活空間のなかで変容していく身体はセックス・ジェンダー・セクシュアリティの統合した身体「Leib」である。ジェンダー改革論はこのLeibの視座から再構築すべきである。統合的なLeibという身体に座標をおくとき、テクノロジー時代のジェンダーの生活空間やジェンダー労働の世界もあらたに見えてくるように思うが、それより以上に身体性の内部空間において発せられる母体の痛みの声、たとえば「胎児性水俣病」や「カネミ油症の黒い赤ちゃん」の母たちの声、「チェルノイブイリ」の母子の声が聴こえてくるのではないだろうか。そうした母たちの声を聴くこともフェミニズムのジェンダー問題であったはずである。

フェミニズム理論は多様である。私が「エコフェミニズム」に注目するのは、それがこうした身体性という視座をもったジェンダー改革を提唱してきたからである。そ

うしたエコフェミニズム理論の考えを「ジェンダー本質主義」の帳から解き放って再考することなしには、フェミニズムは「ジェンダーフリー」論議を超えて、ジェンダー改革の展望も開かれなないように思っている。

・拙稿「生殖技術への視座—エコフェミニズムを中心に—」『相模女子大学紀要』61、1998

「『フェミニンな身体性』理論とはなにか」『現代の理論』日本評論社、2005

「<女性、身体、自然>への現代的視角」『社会思想史研究』27、藤原書店、2003

「技術主義と心身のゆくえ」『人間社会研究』1、相模女子大学、2004

「生殖技術のなかの女性身体をめぐる」『季報 唯物論研究』93、2005

①バックラッシュ派は「ナショナリズム」と「ネオリベラリズム」とが合体した「新保守主義」に依拠しているようである。前者は、教育と家族という領域において性教育批判・ジェンダー教育バッシング・子産みの増強を押し進めるナショナリズムの思潮（これは教育基本法や男女共同参画社会基本法の「改悪」を意図しているといわれている）であり、後者はグローバルな市場経済競争に勝ち抜くためにテクノロジーの開発と個的責任主体を前提とする労働界の成果主義的再編を推進する立場にたっている。

②こうした状況を踏まえ、フェミニズムは「ジェンダー・イクオリティ」の理念に「ジェンダー・イクイティ」という視点を取り入れるようになっている。

③『Q&A 男女共同参画／ジェンダーフリー・バッシング』日本女性学会編、明石書店、2006

④井上輝子「『ジェンダー』『ジェンダーフリー』の使い方・使われ方」若桑みどり他編著『「ジェンダー」の危機を超える』青弓社、2006年。

⑤海妻径子「対抗文化としての反〈フェミナチ〉」木村涼子編『ジェンダー・フリー・トラブル』現代書館、2005年所収。

⑥三砂ちづる『オニババ化する女たち』光文社新書、2004。内田樹・三砂ちづる『身体知』バジリコ、2006。